様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２００５６
研究課題名（和文）現代舞台芸術の映像アーカイヴを利用した実践的研究及び教育方法の開発

研究課題名（英文）A Development of Practical and Educational Utilization of Visual Archive for Contemporary Performing Arts

研究代表者
河合　祥一郎（KAWAI SHOICHIRO）
東京大学大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：40262092

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず、諸外国における舞台芸術映像資料の収集及び公開の方法を調査する一方で、我が国における映像にまつわる版権の問題を考えることがあった。同時に、研究期間終了時にはおおよそ 1100 のタイトルに及んだ映像資料につき、研究参加者が、それを用いて、前期課程、後期課程、大学院レベルでの授業を展開した。また、修士論文・博士論文執筆者には、必要資料を視聴できるシステムを構築した。

研究成果の概要（英文）：This research project continuously engaged with the issue of visual material of contemporary performing arts in Europe and the US, focusing our attention on possible ways to deal with copyright issues. In the meantime, each of us used the archived material in his educational capacity both at undergraduate and graduate levels. We have developed a system of using the archive for those in the process of writing a master's thesis and doctoral dissertation. We now hold about 1100 titles for our archive.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
２０１０年度	3,300,000	990,000	4,290,000
２０１１年度	3,300,000	990,000	4,290,000
２０１２年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
総　計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：舞台芸術、演劇研究、映像資料、アーカイヴ、演劇、ダンス、パフォーマンスアート、現代演劇、パフォーマンス研究

１．研究開始当初の背景

本研究は２００４～２００７年度に行った「現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ構築に向けて」（基盤研究 B、研究代表者：河合祥一郎、研究課題番号：16320033）の研究成果を踏まえて構想されたものである。従前の研究では、舞台芸術をめぐる映像資料についての、多様なレベルでの実態調査が主要な目的であった。諸外国の公的機関がどのような映像資料アーカイヴを持ち、また、どのような収集・運用をしているのか。それには、版権の問題がどうかかわっているのか、等である。その研究成果を得て、本研究は、従前の研究期間に構築を開始した舞台芸術映像資料アーカイヴを使って、具体的な授業――学部レベル、大学院レベル――でどのように活用できるかを、実践的に研究するという方向を明確に打ち出す必要性から構想され

た。

２．研究の目的
研究の目的は舞台芸術の映像資料をめぐる現況を踏まえ、わが国における現代舞台芸術研究の質的量的充実をはかるために、以下の３項目にわけて構想されている。

(1) 映像資料をどのように収集し、それらを研究者のみならず、一般学生や一般市民、あるいは同時代の舞台芸術にかかわる人々にどのように公開していけるのかを検討して提言にまとめる。

(2) そうした資料を具体的にどのように活用した学術研究が可能であるか、具体的かつ実践的な研究の方法論的側面を検討し、そこで得られた知見を元に、参加者が各自の研究領域に、学術論文や学会発表を通じてフィードバックをする。

(3) 同じ資料を使って、大学院レベル、学部レベル、一般教育科目レベルでどのような教育が可能であるかを検討し、具体的な教育方法を開発して実際の教育現場へとフィードバックする。

３．研究の方法
Ⅰ．２００９年度
初年度である２００９年度については、以下の研究内容を各研究分担者とともに実施した。
（１）欧米を中心とする諸外国において、舞台芸術の映像資料がどのように収集され、どのようにアーカイヴ化されているかにつき、すでに前科学研究費補助金の研究によって調査済みの機関であっても、技術的側面等々が日進月歩であることをふまえ、その現状と問題点を比較検討するために、新たに継続的な調査を行った。その際、単なる表面的な調査に終わらないよう、諸外国の諸機関の資料を使って行われている研究が具体的にどのような成果を生んでいるのかまで明らかにすることが目指された。担当は河合祥一郎（日本および英国)、ドゥヴォス、パトリック（フランス)、内野儀（日本およびアメリカ合衆国)、竹内孝宏（日本およびアメリカ合衆国)。ここでは、以下のような観点からの情報と資料の収集が重要となった。
①それぞれの機関がどのような資料をどのようなかたちで所蔵し、どのようにカタログ化し、さらにどのように研究やその他一般の視聴に供されているか。またその研究成果にはどのようなものがあり、どのような形態で公開されているか。
②映像の権利関係の問題。アーティスト、劇場、劇団等、あるいは放送局等とどのような法的契約関係を結んでいるか。
　時間が許す範囲で、実際に海外に調査旅行に出かけたり、国内の演劇関係の映像資料をもつ機関（早稲田大学演劇博物館、京都造形芸術大学等）を訪れたりする必要が当然生じるが、それ以外の情報資料収集の方法も含め、多角的に研究を進めた。また本年度中に、研究参加者がそれぞれ一度は海外に調査と資料収集に出張した。
（２）初年度については、一般公開の予定はなかったが、研究代表者が所属する大学院専攻内で立ち上げた小規模な現代舞台芸術映像のデジタル・アーカイヴ内容の拡充を図り、かつアーカイヴを利用した具体的な研究を開始した。一方、今年度中に、可能な限り、国内に存在するいくつかの重要な劇団やＮＨＫ等多数の映像資料を所蔵する放送局等とデジタル・アーカイヴ拡充のために、具体的な折衝に入った。この作業については、研究参加者全員が担当した。
　以上が初年度の具体的な研究方法・内容となったが、本研究組織がもつマンパワーは限られており、あらゆる現代舞台芸術を研究対象とすることが不可能であることは言うまでもない。したがって、それぞれの専門分野にしたがって、すでに所蔵している映像資料を別にして、どのような映像資料がアーカイヴ拡充のために入手すべきかが問われてしかるべきである。そのため、以下の分担によって、それぞれの関係書籍や諸雑誌などの基礎資料収集も同時並行で行なった。シェイクスピア劇の現代における上演（河合祥一郎)、日本の現代舞台芸術（竹内孝宏)、フランスの舞踊を含む現代舞台芸術（ドヴォス、パトリック)、アメリカ合衆国の現代舞台芸術（内野儀)。また、月に一度程度の研究会を開催し、それぞれの分担する研究の進捗状況についての情報交換や収集した資料についての共同討議、さらに以降の研究方法の具体的方向性等について話し合いを行った。
　こうした研究プロセスを経て、初年度末には、本研究において以下のことが達成されていることが目標となった。
①各研究参加者がすでに所蔵している映像資料のＤＶＤ化とデジタル・アーカイヴ化のための技術的問題に関する知識をアップデートして共有し、実際のアーカイヴ化の作業を継続して進めること。
②各研究参加者が専門とする現代舞台芸術の諸分野につき、既存の映像資料デジタル・アーカイヴを拡充する上で必要な作品や作家を選定し、アーカイヴ拡充の具体的な作業に入ること。
③国内の現代舞台芸術について、当事者や関係者とのコンタクトを取りつつ、可能な限り映像資料を収集し、具体的なデジタル・アーカイヴ拡充の作業を開始すること

④英国、フランス、アメリカ合衆国の公共機関が保持する舞台芸術映像アーカイヴの最先端の情報を収集し、そこで行われている研究教育内容の具体像を把握する。

Ⅱ．２０１０年度以降。
本研究は４年間の研究期間が想定されていた。研究の準備状況から見て、目的として設定した現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイヴ拡充に向けた作業としては、必要な研究期間はだいたいその程度であると考えられたからである。

初年度の成果を受け、２０１０年度以降は、本研究の全体の流れからいうなら、資料収集と実態調査を継続して、われわれの映像資料デジタル・アーカイヴの拡充作業を継続することが主眼となったが、そこから実際の学術論文執筆や教育現場への還元ということへと次第に視点を移動させていった。もちろん、現代芸術を扱う研究の必然から、また、デジタル技術が日進月歩で変化しているという現況から、資料収集や実態調査をやめることはせず、初年度の研究成果を踏まえた上で、映像資料のアーカイヴ拡充とそれの研究・教育現場への還元をより効率的に行う方法を模索してゆくことになった。

研究内容と方法としては、研究分担を含め、初年度の内容を、多少の重点をずらしながら、ほぼ反復することになったが、最終年度の２０１２年度まで継続することになると想定されたのは以下の内容だった。すなわち、
①以下の分担によって、それぞれの関係書籍や諸雑誌などの基礎資料の継続的収集を行う――シェイクスピア劇の現代における上演（河合祥一郎）、日本の現代舞台芸術（竹内孝宏）、フランスの舞踊を含む現代舞台芸術（ドヴォス、パトリック）、アメリカ合衆国の現代舞台芸術（内野儀）。
②また、月に一度程度の研究会を開催し、それぞれの分担する研究の進捗状況についての情報交換や資料の共同討議、さらに以降の研究方法の具体的方向性等について話し合う。

さらに２０１０年度からは、初年度の研究成果を経て、映像資料を使った授業のさまざまな形態を検討することになった。具体的には、映像のリテラシーというものを、一般教育課程、学部、さらに大学院レベルで、それぞれどの程度まで確保できるかが重要なファクターとなることが予測されたわけだが、ライヴで接していない舞台の映像資料から、それを見るものは何を読み取るべきなのか、あるいは何を読み取ってはいけないのか、そうした詳細にわたる事項の検討を経るなかで、より効果のある教育方法の模索をしてゆくことになった。

授業におけるアーカイヴ利用については、研究開始時から、すでにある現代舞台芸術アーカイヴの映像資料を利用した授業を、前期課程、後期課程、大学院のそれぞれの課程で、研究参加者が展開し、好評を得た。また、大学院生については、修士論文、あるいは博士論文執筆のためという目的が明確なものに限り、アーカイヴのその場での視聴を許可した。その成果が十分に得られたところまではいっていないが、今後、当該研究科に提出される現代舞台芸術関係の論文に反映されるものと期待されている。なお、昨年度末の時点で、当該アーカイヴにはおおよそ 1100 のタイトルが所蔵されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 内野儀、続・10 年代の上演系芸術―「ドメスティックな抜けてしまった底」を修復するために、『ユリイカ』、査読有、45 巻 1 号、66-74、2013。
② 竹内孝宏、現代の大衆演劇における「大衆性」の構造――予備的考察（研究ノート）、『青山総合文化政策学』、査読有、通巻 6 号（第 5 巻第 1 号）、105-118、2013。
③ ドゥヴォス, パトリック、大野一雄の 80 年代――フランスの舞台評を読んで、舞踊学、査読有、『舞踊学』、第 34 号、92-96、2012。
④ Shoichiro Kawai, Kabuki Twelfth Night and Kyogen Richard III: Shakespeare as a Cultural Catalyst, *Shakespeare Survey*, 査読有、64, 114-20、2011。
⑤ 内野儀、村上春樹を上演(perform=embody)するために―<いま、ここ>のマテリアリティの複雑化ということ、『ユリイカ』、査読有、42 巻 15 号、183-191、2010。
⑥ 内野儀、10 年代の上演系芸術―ヨーロッパの「田舎」をやめることについて、『ユリイカ』、査読有、42 巻 10 号. 131-139、2010。
⑦ 内野儀、科学/ガリレイ/革命―ブレヒト『ガリレイの生涯』をめぐって、『現代思想』、査読有、37 巻 12 号、177-191、2009。
⑧ Shoichiro Kawai, More Japanized, Casual, and Transgender Shakespeares, *Shakespeare Survey* ,査読有、62、261-72、2009。
⑨ 内野儀、パフォーマンス研究の現在―パフォーマテイヴィティ・身体・認知、『ヒューマン・コミュニケーション研究』、査読有、第 37 号、5-24、2009。
⑩ ドゥヴォス, パトリック、フランスの演

劇人たちは歌舞伎に何を見出してきたか、おちこち、査読有、『おちこち』、第 29 号、56-59、2009。

〔学会発表〕（計１３件）

① UCHINO, Tadashi、What about Machines?: Technology and Politics in Japan’s Contemporary Performance Culture, 2012.11.3., International Symposium of the Korean Society of Dance、招聘講演、成均館大学（ソウル）、2013. 1. 7., International Seminar for Theater Ustav 15th Bharat Rang Mahotsav, 招聘講演、National School of Drama, New Delhi, India。

② UCHINO, Tadashi、英米の 19 世紀転換期演劇論について、「ヨーロッパ 19 世紀転換期演劇論――演劇映像学連携拠点「翻訳プロジェクト」をめぐって、日本演劇学会秋の研究集会におけるシンポジウムパネラー、2011.12.3.、早稲田大学。

③ UCHINO, Tadashi、From Humanism to Posthumanism and Back?, Keynote, Asia ICH Performing Arts Forum, 2011.11.26、Studio Theatre, Hong Kong Cultural Center。

④ UCHINO, Tadashi、ドラマの身体――テネシー・ウィリアムズのテクスト的身体、日本英文学会九州支部第 64 回大会におけるシンポジウム「テネシー・ウィリアムズと身体」における研究発表、2011.10.29. 大分大学。

⑤ 河合祥一郎、*Shylock in Disguise*、日本シェイクスピア協会主催 Andrew Gurr 教授シンポジウム、2011 年 10 月 27 日、京都大学。

⑥ UCHINO, Tadashi、”Database Animals” and the Avant-garde: Materializing Transnational, Transient Subjectivities in Posthumanity, 2011.9.23., 基調講演、第 4 回広州トリエンナーレ・オープニングシンポジウム、広州美術館。

⑦ 竹内孝宏、分離の機能と効果――日本の近代演劇受容と劇団四季の方法、UTCP-ヨンセ国学研究院ワークショップ「批評と非人間」、2011 年 6 月 11 日、ヨンセ大学（韓国）

⑧ UCHINO, Tadashi、Against the Eurocentric?: From “Cute” to “Outrageous” in Contemporary Performance Culture in Japan, 2011.2.23., 招待講演、Center for Performance Studies, UCLA。

⑨ UCHINO, Tadashi、What about Machines?: Performing “J-type Technology” in Japan’s Contemporary Performance Culture, 2010.10.16, Association for Japanese Literary Studies, the 19th Annual Meeting における基調講演、Yale University。

⑩ 河合祥一郎、*Kyogen and Shakespeare: Less than Kin and More than Kind*、第 34 回国際シェイクスピ学会、2010 年 8 月 13 日、シェイクスピア研究所（イギリス）

⑪ 内野儀 、グローバルな交渉は起きているし、起きていない――チェルフィッチュによる現在進行形のアトランダムな接合をとりあえず記述=肯定すること、第 5 回表象文化論学会シンポジウム「現代日本文化のグローバルな交渉」、2010.7.3.、青山学院大学。

⑫ ドゥヴォス, パトリック、土方巽を翻訳することが可能か、土方巽ー言葉と身体をめぐって、2009 11 月 14 日、京都造形芸術大学。

⑬ UCHINO, Tadashi、Misperforming and the Everyday: Oshima Nagisa’s Shinjuku Dorobo Nikki (1968)、Performance Studies International #15, 2009.6.24-27, University of Zagreb, Zagreb, Croatia.

〔図書〕（計３件）

① 河合祥一郎、モンゴメリにとってシェイクスピアとは何か、村岡恵理（編）『村岡花子と赤毛のアンの世界』、河出書房新社、全 255 頁、2013。

② 河合祥一郎（編）、幽霊学入門、新書館、全 226 頁、2010。

③ UCHINO, Tadashi、Crucible Bodies – Post-War Japanese Performance From Brecht to the Millennium、London: Seagull Books、全 212 頁、2009。

６．研究組織

(1)研究代表者

河合　祥一郎（KAWAI SHOICHIRO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：４０２６２０９２

(2)研究分担者

ドゥヴォス　パトリック（De Vos Patrick）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：００２４２０３２
内野　儀（UCHINO TADASHI）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：４０１６８７１１
竹内　孝宏（TAKEUCHI TAKAHIRO）
青山学院大学・総合文化政策学部・教授
研究者番号：６０３０２８１６